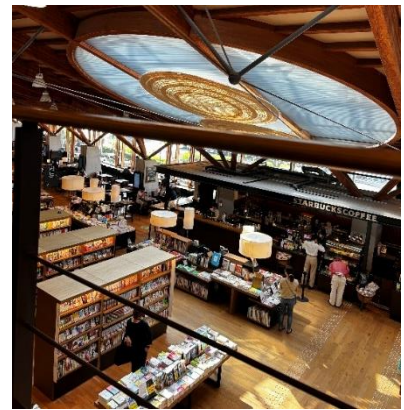


【視察調査報告書】

会 派 名	立憲民主・市民の会
参 加 議 員	【議員】 5名 安藤 修三、小林 裕恵、森 喜彦、浜野 正太、九鬼 ともみ
日 程	令和 7年（2025年）5月19日（月）～ 5月21日（水）
詳 細	
視察日及び視察先	5月19日（月） 佐賀県 武雄市
視 察 内 容	武雄市図書館における民間連携と地域活性化の取組について
概 要	武雄市図書館は、佐賀県武雄市が2013年に大幅リニューアルを行い、民間企業カルチャ・コンビニエンス・クラブ（CCC）との官民連携により運営されている全国的にも注目の公共図書館である。設計段階から全市民アンケートを行い、利用者の意見を反映させた構成が特徴で、自然を活かした建築と温かみのある内装、回遊性を意識した空間づくりがなされている。 館内にはスターバックス、TSUTAYA 書店が併設され、雑誌閲覧スペースやWi-Fi 環境、ブック＆カフェスタイルが導入されていることで、「本を読む場」から「滞在し交流する場」へと役割が広がっている。365日開館・夜21時までの開館時間も好評で、従来は短時間滞在だった利用者が長時間過ごすようになった。また、年間1000回を超えるイベント・講座を開催し、市民参加型の活動も盛んである。子ども図書館を別棟に設けることで、親子が安心して過ごせる配慮がなされ、施設の間には芝生の広場もあり、地域の憩いの場としても活用されている。 武雄市図書館は、指定管理者制度の可能性を活かしつつ、地域の知的・文化的交流拠点として、地域に根付いた運営が展開されていた。
所 感 等 （意見・課題・ 本市への反映など）	武雄市図書館の視察では、「図書館を使ったまちづくり」の可能性を強く感じた。民間の発想を活かしながら、単に本を借りるだけでなく、居心地のよさや出会い、滞在型の活用を生み出していた点が印象的であった。オープンスペースでの講座や多様なイベント、そして親子で安心して過ごせる分棟の工夫など、多世代に対応した設計が施されていた。 また、従来の「貸出冊数」などの指標だけでは捉えられない新しい価値づけがなされている点も重要である。八王子市においても、図書館の役割を再定義し、市民が自然に集まりたくなる場づくりに挑戦する際の好事例として参考になる。
視察の様子	



武雄市図書館 館長による講義



館内より書店エリアを見下ろす



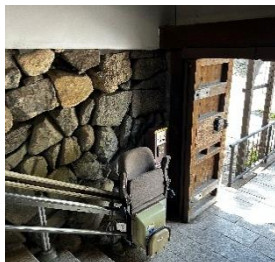
こども図書館 おはなしラボ



こども図書館 壁面

視察日及び視察先	5月20日（火） 佐賀県伊万里市
視 察 内 容	いまりの里運営について
概 要	「いまりの里」は、佐賀県伊万里市にある就労継続支援B型事業所で、社会福祉法人幸生会が運営している。昭和59年に民家の一室で始まった活動が原点であり、地域に根ざした福祉実践の蓄積が今日の施設運営に息づいている。平成11年に授産施設として正式開所し、現在は定員40名、職員11名体制で運営されている（うち複数名が兼務）。 特徴的なのは、地域の伝統産業である「有田焼」の窯で用いられるアカマツの薪を、施設利用者が製造している点である。家庭用としては使えない赤松の薪だが、高温で燃える特性を活かし、伊万里市で唯一この施設が製造を担っており、伝統産業を支える重要な役割を果たしている。 そのほかにも、アルミ缶つぶし、図書館・保育園の清掃、除草や剪定作業、ビニールハウス用部品の組立など、多様な作業が提供されている。また、地域の小学校等での福祉体験学習への講師派遣や、ゴミ屋敷支援など、福祉と地域の橋渡し役も担っている。

	利用者は 20 代から 60 代まで幅広く、とくに 30～40 代が多い。支援においては個別支援計画を作成し、利用者のプライドや意向を尊重しながら、その人らしい生活の実現を支えている。
所 感 等 (意見・課題・本市への反映など)	いまりの里の視察を通じて、地域の福祉施設が単に「支援の場」とどまらず、地域社会の中で確かな役割を果たしていることを実感した。アカマツの薪づくりという地域固有の産業に関わる作業を通じて、利用者が地域の一員として働き、誇りを持っている姿は非常に印象的だった。また、外部委託の清掃業務や福祉教育などを積極的に担っていることから、施設が地域に開かれた存在として機能していることが分かる。 特に「プライドを傷つけない支援」という言葉に、現場の真摯な姿勢が現れていた。八王子市でも、こうした小規模ながらも柔軟で地域に根ざした支援体制の在り方を参考に、障害者福祉と地域社会とのつながりを再構築するヒントを得ることができた。
視察の様子	
 「いまりの里」 玄関前で  農産物の計量作業  ビニールハウス用ボルトのセット  ここでアカマツの大木を乾燥させる  薪のサイズに揃える	
視察日及び視察先	5 月 20 日 (火) 福岡県北九州市

視 察 内 容	観光遺産小倉城 構想から実施までの過程について		
概 要	北九州市の観光資源である小倉城は、指定管理者制度を活用し、観光施設として再整備・運営されている。特筆すべきは、管理者自身が「仕様書どおりに業務をこなす」のではなく、自ら積極的に投資し、情報発信・イベント企画・集客戦略などを担っている点である。TikTok や Instagram など SNS の活用にも注力しており、各プラットフォームで全国上位にランクイン。週に 2 回のプレスリリース発信や、仕掛け型のイベント企画など、マーケティング的視点での運営がなされている。指定管理料は年間約 1 億円、従業員は 80 人を超える体制で運営されており、自主財源確保の努力が欠かせない。 注目すべきは、「指定管理者の選定プロセスや仕様書の在り方」に対する問題提起である。評価の透明性不足や審査員の実務理解の欠如により、本当に価値を生み出せる事業者が選ばれにくい現状がある。大阪スタイルの「自由にやらせて結果で見る」運用も紹介され、制度の柔軟性が成果に直結するという考えが示された。 観光を“自治体が稼ぐ力”として捉える視点と、官民の信頼関係構築が今後のカギとなる。		
所 感 等 (意見・課題・ 本市への反映など)	小倉城の事例からは、観光資源を活かすには「誰がどう使うか」によって価値が大きく変わるということを実感した。指定管理者が創意工夫を重ね、経営的視点を持って運営に取り組む姿勢は、施設を活性化させる最大の力となる。金額で縛るのではなく、自由度と責任をセットで設計し、成果を市民に返していく構造が理想である。 八王子市においても、観光や施設管理において制度の運用方法を見直し、民間の力を引き出す土壌を整える必要性を感じた。特に、仕様書の質と審査体制の改善が、今後の自治体経営の鍵を握るといえる。		
視察の様子			
 隣接する小倉城庭園にて  最上階のカフェスペース  1 階展示：迎え虎  城内に設置されたエレベータ			
視察日及び視察先	5 月 21 日 (水)	福岡県福岡市	

視 察 内 容	産業育成(Fukuoka Growth Next)について
概 要	福岡市のスタートアップ支援拠点「Fukuoka Growth Next (FGN)」は、旧大名小学校をリノベーションし、官民連携で 2017 年に開設された施設である。福岡市は 2011 年よりスタートアップ支援に着手し、2014 年には全国初の「スタートアップ支援条例」を制定。FGN は、市と民間企業、金融機関が協働する中核施設であり、創業相談、資金調達支援、メンタリング、企業間マッチング等、多面的な支援を展開している。 運営形態は組合方式を採用し、運営委員会にはみずほ銀行も参画。市は年間 2 億円を拠出し、スポンサー制度も活用している。家賃は民業を圧迫しない水準に設定され、社会起業家の支援や、高成長を目指す企業への集中支援 (High Growth Program) など、支援対象の段階に応じた柔軟な支援を実施。また、地元中小企業や大学との連携にも力を入れており、産学連携による技術活用や、FGN 卒業後における継続的支援も行っている。さらに、ふるさと納税を活用したスタートアップ補助制度や、資金ショート・再挑戦時の法的支援など、持続可能な起業支援体制を整えている。
所 感 等 (意見・課題・ 本市への反映など)	福岡市の産業育成策は、行政主導ではなく、民間の力を最大限活用し、官民共創によって“挑戦する人が集う都市”を実現しようとする姿勢が印象的であった。特に、自治体が「失敗を許容し、再挑戦を支援する仕組み」を制度として持っている点は、多くの地域にとって示唆に富む。高い目標（ユニコーン企業 10 社）を掲げ、成功モデルを可視化することで、他の挑戦者への波及効果を狙う姿勢も先進的である。 また、地元企業や大学との接続により、創業者の孤立を防ぎ、地域全体で人材と知見を循環させている点は、八王子市の南大沢地区にも応用可能と感じた。支援者の“人”に重きを置いた体制づくり、属人的ネットワークの活用も、信頼に基づく関係性の重要性を再認識させられる視察であった。
視察の様子	
 ↑ 廃校を利用した FGN	 ↑ 雇用労働相談センター  ↓ 施設を案内していただく 
Share Office →	